

## 「うらどっこ」を作る子どもたちと仲間の教師たち

ゆとりと自由があつてこそその研修

森 尚水（高知市立浦戸小学校）

MORI Syousui(Urado Primary School)

### 1. 学校現場から学ぶ

高知県の男教師では教壇教師として、上から2番目（1番目は私より1歳年上）である。教師歴は臨時を入れて、27年。そのうち26年は学級担任をしている。現在は高知市浦戸小学校（教職員13名、児童数60名）に12年間勤務。私はここ3年間連続6年生担任、また今年は校務として研究主任、体育主任など担当している。

まず、大まかな私の学校での1日の動きを紹介することにしよう。（一学期）

午前 7:00 学校着。そして、プールの管理（水と薬入れなど）

7:30 希望している子どもとの学習（30分間）

8:00 プリントの印刷、プリント作り、雑談

8:30 職朝（このとき子どもは自習）

8:45 1時限目始まり ※平均1日1時間空き時間あり。（そのとき、プリントや通信作り。）昼休みはおもに雑談

午後 3:45 6時限目終わり

4:10 子ども帰る ※プリント作り、学級通信作り、印刷。職場での雑談

6:30 学校を出る（家まで車で40分、バスで1時間30分）

私が毎日必ずしていること。①算数プリント作り（授業の反省をもとに次の日のプリントを作る）②学級通信1日に1～2枚（1学期111号、ガリ版）③日刊地域新聞「うらどっこ」の印刷（9年間、子どもたちが学校のある日は一度も休まず地域に発行している。）

以上が1日の行動である。このスケジュールを見てわかるように1日の半分は学校勤務である。また休みの日に、印刷などのため学校へ行くこともしばしばある。それでも浦戸小学校は、高知市内の他の学校と比べて、格段に楽しく、居心地がよいと言われる。それは、放課後週1回の職員会以外ほとんど会がなく、教師が自由に動けるからである。また教育活動にほぼ制約がないからである。

たとえば私は、教育委員会主催、官民主催のものなど、この15年間で、1回教育課程伝達講習に出ただけである。研究主任会、体育主任会、小中連携の研究会などのさまざまな研修の不参加である。年齢的なものもあるだろうが、このことで管理職より一度も指摘さ

れたことはない。

つまり、教師教育で最も重要なことは、「自由とゆとり」である。このことがある意味では「最高の研修」であるといっても過言ではない。

ところが、ここ数年全国的にも注目されてきた「土佐の教育改革」は、イベントを中心にしたものばかりが目につき、多忙化の促進をはかっている。「土佐の教育改革」についてはかなり現場でも、組合でも評価が異なる。白黒で評価すべきではないが、総じて小・中学校の現場教員からは消極的な声が多い。私もその一人である。そのうえ、総合学習、コンピュータ導入のための研修など、ますます多忙化が進み、子どもの深刻化とあいまって、学校現場に「おちつき」がなくなってきている。

私の学校でも、コンピュータの研修に出かける教師が多い。

「わざわざ、コンピュータ使わなくても、自分の手でやった方が早いで」

と話していると、

「次の学校に行って、職場がおもしろくなかったら、このコンピュータをつついて、人と顔あわせんようにするがに、今習いゆが」

つまり人間関係をゆたかにするための道具が、人間関係が貧弱になると考えたうえ、コンピュータへの逃亡を企てているのである。それは、教師関係だけでなく、子どもとの関係が劣悪になり、コンピュータに逃げ込んでいく場合もある。

総合学習も同じく多忙化を促進している。

わずか3時間のために、膨大な準備時間をとる学校も多い。そのイベントがマスコミにのり、評価されることが、「子どもに生きる力」を育てていると考えている管理者も少なくない。「地域に根ざした教育」というより、「教育委員会に根ざした教育」といった方がよいであろう。特に高知県では全国に先駆けボーナスへの成績率が導入された。その結果「教育委員会に根ざした教育」はますます進行するであろう。

一方、学校や教師自らが作り出している多忙化も軽視できない。子どもたちの良さを保護者や地域の人に見ていただきたいという教師の善意が、音楽会や運動会での時間をかけた練習、また、図画、作文などのコンクールへの提出に向け多大な時間をかけていることが、子どものみならず自らをも苦しめている。もちろん教科学習にゆとりがあれば、行事やコンクールなどへの取り組みも可能なのだが。たとえば、音楽会練習期間を1ヶ月として、その間の練習期間は3～4ヶ月分の音楽の時間を必要とする。こういうことが1年中あると、学期始めに提出した時間割はほとんど用を成さない。子どもにとって真に意味のある学習は、学年や学校のあり方で変わることがあまりにも多い。

さらに、学校の研究テーマが子どもの実態に合わず、管理職が体育だから体育をテーマにしたものを、国語だから国語をテーマにしたものをとったような決まり方をする場合も多い。その結果、職場の教師仲間の持ち味を十分に発揮できず、集団としての教育財産が共有できず、また作られない場合が多い。

もちろん、内と外の多忙化は複雑に絡み合っているので、教師の一方的な多忙化推進と

は言えないが、少なくとも、自分たちで一定改善しあうことができる。

私はやはり「教育とは何か」をたえず集団的に問い直す時間と場所が必要だと考える。

## 2. 朝倉ゼミナールから学ぶ

朝倉ゼミナールとは、高知市の朝倉で、中高生を中心に20年間近く続けている文化・教育活動である。昨年度の活動を簡単に紹介しよう。

4月	開校式	中学生は週3回2時間程度、英・数・社・理の学習、親の 会月1回。高校生は週1回2時間程度、数学の 学習。
5月	総会	学習会
6月		学習会
7月	中3生 夏休み	25日から午前9:00～午後5:00（20日間ぐらい学習会） 午後6:00～午後9:00（5日間ぐらい学習会）
8月		
9・10月		キャンプ 1泊2日
11月	マリンバコンサート	学習会
12月	冬休み	午前9:00～午後9:30（10日間、中学3年生の受験学習 会）
2月	鳥取大山 スキー	1泊2日 学習会
3月	受験 閉校式	

ほぼ1年間このような活動を続けている。50坪の館を建て、10年近くなる。ここには、不登校の子ども、5教科オール1の子ども、朝倉地域・高知市と高知市周辺の子どものなど、その年々でいろんな子どもが集まってくる。今年は中高校生あわせて約30名。指導者はボランティア4名、アルバイト2～3名である。

学力の高い子どもも何人かはいるが、どちらかといえば低学力の子どもが多く、13-8、6×8ができない中学3年生もいる。このような中学生が、夏休みの1ヶ月で中学3年間のプラス・マイナス、方程式、文字式、不等式、因数分解、根号などの基本的なことをほとんどマスターするのである。ただ、受験を目の前に抱えているので、どうしても「できる」ということを大切に、「わかってできる」という道筋を通れない子どももいる。こんな子どももいた。

「8×6は？」と少し大きな声でたずねると、「先生、大きい声だすな」という返事。「どうして」と問い直すと、「恥ずかしい」という。同年齢の子どもがそばでしているので、小学2年生の学習ではプライドに傷がつくのである。

こういう失敗を繰り返しながら、「13-8」を教えるのに「8-13」を教え、「8と13はどちらが大きい?」「13よ」「そしたら13の前に-をつけて、それから13-8を計算するが」

8×6を教えるのは「-8×6は」というように中学校の問題として教えるのである。

私は、このセミナーで、数学と社会を中心に教えているが、20年近く教えていると子どもたちからいろいろなことを学ぶ。ある夏、茶髪で、来ても全く学習をしないで寝ている子どもがいた。他の子どもも因数分解がわからず悩んでいたので何かよい方法はないかと考え、一つのとき方を思いついた。公式を使わずにとく。

$$\begin{aligned} \textcircled{1} \quad & 2x^2 + 6x + 4 \Rightarrow \textcircled{2} \quad \begin{array}{r} 2) \ 2x^2 + 6x + 4 \\ \underline{x^2 + 3x + 2} \end{array} \Rightarrow \textcircled{3} \quad \begin{array}{r} 2) \ 2x^2 + 6x + 4 \\ \underline{1) \ x^2 + 3x + 2} \end{array} \\ \Rightarrow \textcircled{4} \quad & \begin{array}{r} 2) \ 2x^2 + 6x + 4 \\ \underline{1) \ x^2 + 3x + 2} \\ \phantom{2) \ } ( \quad ) ( \quad ) \end{array} \Rightarrow \textcircled{5} \quad \begin{array}{r} 2) \ 2x^2 + 6x + 4 \\ \underline{1) \ x^2 + 3x + 2} \\ \phantom{2) \ } (x \quad ) (x \quad ) \end{array} \Rightarrow \textcircled{6} \quad \begin{array}{r} 2) \ 2x^2 + 6x + 4 \\ \underline{1) \ x^2 + 3x + 2} \\ \phantom{2) \ } 2(x+1) (x+2) \end{array} \end{aligned}$$

因数分解の順序性をしっかりと押さえれば、実は簡単に因数分解できるのである。わずか1時間で、教科書の問題が全てできたのである。あれほどできなかった数学が、一瞬にしてとけたのである。このように、中学3年生のつまずきを調べていると、その多くが小学校の学習にきわめてムダがあるということがわかってきた。特に大きな数の計算ドリル、さらに計算の仕方(過程)が乱暴であることなど…

つまり、小学校の教師も中学校、できれば高校をも視野に入れた専門的力を身につけることが大切であるということ、また、数学がさっぱりでも社会は大好きといった中学生がしばしばいる。中学校の教師は2教科の専門的力を備えていった方が子どもを固定的にとらえないためにも良いのではないかと考えるようになってきた。これは免許制度にも関わってくる課題だといえる。

さて、話は変わるが、私は全く泳げない。その泳げない私ですら、ここ15年間教えてきた子どもは100%、1000m以上泳げるようになった。7~8m泳げる子どもなら5分以内に25m泳げるようにできる。また1000mに今ではプールを始めて、6、7回で達成するようになった。どうしてか、それは、子どものつまずきに学び、あれこれと工夫を重ねてきたからである。

教師が専門的力をつくっていくこと、それは、体育一般、理科一般ということではなく、一つの得意技、こだわりを持つことと、それを広げていく努力をすることでいいのではと思っている。そういうゆとりが今、どうしても必要なのである。

最後に、きわめてまじめな教師たちの何人かは「子どもとの関係」・「教師間のあつれき」・「父母とのもつれ」などにより、休まざるをえない状況に追い込まれている。外から見る以上に「きびしい仕事」である。また一方では、子どもと教育に深くかかわり、「こういう学習」をしたいと思っても教育委員会が認めず、退職していく人もいる。教育委員会の腕の中から飛び出していく教師の研修を認めない限り、真の教師教育はあり得ないだろう。